

原著論文

冊封使趙文楷と李鼎元の目に映る琉球女性

李 舒陵*

Ryukyu women in the eyes of Chinese Envoys Zhao Wenkai and Li Dingyuan

Shuling Lee*

要 旨

冊封使の使録及び冊封使が残した漢詩において、琉球の風俗に触れたものの中で、琉球の女性は必ず取り上げられているテーマのうちのひとつである。特に頭に物を載せる女性と赤い絹をつけている遊女は注目されている。冊封使にとって琉球女性は中国の女性とは風貌も異なる異国の存在で、冊封使らはそうした琉球女性について深い印象を残している。先行研究では、1800年に琉球国の世孫尚温を国王に冊封するため来琉した趙文楷と李鼎元の残した琉球女性についての作品については、歴代の冊封使の作品と着目した視点に大きな違いがないように見られるが、果たして実際にそうなのであろうか。

本稿では、趙文楷の「球女」、李鼎元の「中山雜詩二十首」其の六、「和寄塵竹枝詞十首并序」（その五、その六、その九）の5首の作品の分析を通して、趙文楷と李鼎元の眼に映った「琉球女性」のイメージと、その作品の背景を考察しながら、着目した視点そして琉球女性の庶民的な日常生活の一端を明らかにしてみたい。そうした点を通して、先行研究の指摘や評価についても検討も試みることにする。

キーワード：琉球女性、琉球漢詩、嘉慶五年、趙文楷、李鼎元

Abstract

Ryukyu women are one of the themes that are always taken up in the records and the Chinese poetry left by Chinese envoys, which touched on the customs of Ryukyu. In particular, women who put something on their head and prostitutes who wear red silk are attracting attention. For the envoy, Ryukyu women are exotic and look different from Chinese women. Accordingly, the envoys leave a deep impression on such Ryukyu women. In previous studies, there seems to be no big difference between the works about Ryukyu women of successive envoys and the works left by Zhao Wenkai and Lee Dingyuan, who came to Ryukyu to confer the title of king on Sho On in 1800. It can be seen in, but is it really the case?

In this paper, through analysis Zhao Wenkai's "Kyujo", Li Dingyuan's "Nakayama Miscellaneous Poems Twenty" (No.5,6,9), I would like to consider the image of "Ryukyu women" in the eyes of Zhao Wenkai and Li Dingyuan and the background of the work. At the same time, I would like to clarify the view point of Zhao Wenkai and Li Dingyuan and a part of Ryukyu women's daily life. Through such a process, I will try to consider the argument and evaluations of previous studies.

Keywords: Ryukyu Women, Poetry by Chinese Envoys, 1800s, Zhao Wenkai, Li Dingyuan

* 名桜大学大学院国際文化研究博士後期課程 〒905-8585 沖縄県名護市為又1220-1 Doctoral course of International Cultural Studies, Meio University, 1220-1 Biimata, Nago, Okinawa 905-8585 Japan

はじめに

冊封使の使録及び冊封使が残した漢詩において、琉球の風俗をテーマにしたものは豊富にある。その中で、琉球の女性は必ず取り上げられているテーマのひとつである。琉球女性は中国の女性とは風貌や振る舞いが異なり、冊封使らはそうした琉球女性について深い印象を抱いている。

冊封使の琉球の女性に関する漢詩の先行研究では、平良妙子の「来琉冊封使の旅程と作品—清代の詩文を中心に—」¹の「風俗」の章、童宏民の「冊封副使徐葆光の眼光：『奉使琉球詩』の分析を中心に」²の第4章第2節「琉球の女性」、廖肇亨の「乾嘉詩學中的琉球光影—以嘉慶五年琉球冊封使趙文楷、李鼎元の海洋體驗為中心」³及び「歸來壓扁翠雲鬢：琉球竹枝詞中的女性角色與社會生活」⁴が挙げられる。

平良妙子は、冊封使の作品中、琉球女性について詠んだものを、①市場における女性、②妓女（侏儸）、③服飾、④その他（入れ墨、毛遊び）の4つに分類し、①市場における女性を題材にした作品が最も多いことを指摘している。市場における女性について、平良妙子は「当時では、市場に出て商売をするのは女性の仕事であり、当たり前のように女性が行き来をする。それは、冊封使たちにとっては非常に珍しかったのであろう、使録における記述も作品も多い⁵。」と指摘し、合わせて徐葆光「中山竹枝詞 其四」、王文治「虛市」、趙文楷「球女」、李鼎元「中山雜詩二十首 其六」、齊鯤「中山雜咏 其七」の5つの作品を紹介し、「どの作品でも描かれている女性の姿は、それほど変化はない。それから、冊封使達の驚きを示しているかと思われる⁶。」と、冊封使らの同様な印象の深さを説明している。②妓女（侏儸）の描写について、平良妙子は、「ジュリは、服装なども一般の女性達とは異なっていたようで、…紅い衣服を身に纏い一見して識別できるようになっていたようである。」と指摘し、また汪楫の「中山竹枝詞其一」と齊鯤の「中山雜咏 其八」を挙げ、「中国からの使者が通うようになると妓女達は金銀の簪を挿し、特権を持つようになっていたことが分かる⁷。」と記している。金銀の簪は彼等（中国人）からもらったものである。③の服飾について、歴代冊封使が漢詩の内容と使録に記したのものには大きな差異はなく、また汪楫「中山竹枝詞其二」及び徐葆光「中山竹枝詞其二」を挙げ、女性の服装については帯を締めないこと、男女とも耳飾はしないこと、頭上の髻も男女に大きな違いはなく、逆さまに簪を挿すといった特徴を記し関心を示しているといった指摘をしている。④その他（入れ墨、毛遊び）のカテゴリーでは、徐葆光が「中山竹枝詞其三」にて女性らのハジチを「手の甲のみならず腕にも入墨を施している⁸」状況を紹介し、また、齊

鯤の「中山雜咏 其六」では、月光の下の浜辺で連れ立って歌を歌う場面について、これは琉球の風俗の「毛遊び」であろうといった考察をしている。

また、童宏民の研究では、徐葆光の「竹枝詞」と「子夜歌」を中心に、歴代冊封使の琉球の女性に関する描写を比較している。童宏民は、「徐葆光は琉球女性の衣服の特徴として、『腰無帶』（腰に帯がない）、『左右手曳襟以行』（左右の手で襟をもって歩く）、『春風小開處、露出紫荷囊』（春風が一吹きすると、衣装は小さく開かれる）といったことを挙げている。」と紹介し、汪楫、周煌、李鼎元の琉球女性の髪型および髪飾（髮簪）に関する記録も徐葆光の記載とほぼ同様であるが、婦人の衣装は帯を着用していないものの畳襟は二重になっており、そのために「風不得開」（風によって開くことはない）と記している点については、実際に徐葆光が見た様相とは異なるとしている⁹。なお、同研究では、徐葆光が「子夜歌」（12首）の中で、想像の世界の虚構による手法で一人の遊女の語りの形を用い、冊封使に随従してきた中国からの客人と遊女の間における心情を細やかな筆致で描きだしていることについて、それは「道德規範」の尺度で遊女（土妓・紅衣人）を批判した張学礼、周煌、李鼎元等とは全く異なり、歴代の冊封使の中では徐葆光だけが遊女を蔑視せず、冷静に客観視する視点を持ち得ているとし、「冊封に関わる諸儀礼をおこなう外交の現場で、王府が女人禁制を建前とし、一切女性を冊封使に接近させなかった状況下で、伝統的な〈子夜歌〉の手法を用い、遊女を深い情感をもつ人間性あふれる女性として捉え、その恋心を、実に見事に文学的に表現したことに大きな驚きを感じる¹⁰。」と徐葆光を評している。

一方、廖肇亨は「乾嘉詩學中的琉球光影—以嘉慶五年琉球冊封使趙文楷、李鼎元の海洋體驗為中心」において、趙文楷及び李鼎元の描出した琉球女性に関する作品について、「清代中葉の琉球の労働市場の女性を中心とする光景は、父権・宗法制社会から来た男性労働力の一端を担う漢人士大夫 趙文楷、李鼎元等にある種の大きな文化的衝撃をもたらした¹¹。」といった指摘をしている。さらに、廖肇亨は「歸來壓扁翠雲鬢：琉球竹枝詞中的女性角色與社會生活」で、歴代冊封使が女性について記した使録と漢詩に分析を加えている。その中で、廖肇亨は「琉球の女性の服飾、玳瑁の簪、手の上の刺青に関する記述は、中国からの使節の琉球の女性に対する性差と文化に関する認識を反映している」とし、また汪楫、林麟焜、徐葆光の琉球竹枝詞から、労を厭わぬ有能な琉球の女性と比較すると、琉球の男性は安楽を好み日常の労苦を嫌う傾向を見せているとし、無意識に中国の農耕型と琉球の海商型文化の違いを映し出しているといった指摘をしている¹²。廖肇亨は、琉球国はもとより農業立国ではなく、労働力を大量に投入する中国の農業生産形態とは異

なり、男性は海洋貿易で外へと向かうため「冊封使の見た琉球男性は、航海と航海の間の短い休憩中であつた可能性が高い¹³」との見方を示している。また、冊封使の琉球の女性に対する印象は、赤い服の妓女（紅衣土妓）と頭で荷物を運ぶ女性（頂運南姑）の2種に分けられるとしている¹⁴。特に紅衣土妓について、廖肇亨は身分を識別できる簪から考察し、元々琉球の一般女性が使用していた玳瑁の簪は、齊鯤の「中山雜咏十首」之八と費錫章の「琉球雜咏」之九以降に「琉球冊封使は、紅衣土妓と玳瑁の簪を並べ、両者に共通の文化的具象を示させている¹⁵」としている。同時に、いつも玳瑁の簪を髪飾りにしている紅衣土妓が、もし中国の客人から金や銀の簪を贈られたときには慣例を破ってそれを身に着けることができるため、廖肇亨は「紅衣土妓が銀の簪を身に着けているイメージは、中琉の文化接触のある種の融合を示している¹⁶」と述べている。一方、廖肇亨は、紅衣土妓と同様、冊封使を喫驚させたのは、頭に荷物を載せて運ぶ一般の婦女の姿であり、頭で物を運ぶ習俗は中国、特に中原では、見られない光景であるため、冊封使の使録や作品でも度々それに触れているとの認識を示している。また廖肇亨は、徐葆光の書いた頂運南姑の「竹枝詞」（…頭戴荷筐趁墟去，歸來壓匾翠雲鬢）及び遊女の心情を描写した「子夜歌」（…戴筐幾許重，壓匾翠雲鬢）では、徐葆光の筆に依れば、紅衣土妓と頂運南姑の身分は相通ずるところがあり、徐葆光の目から見た遊女と村の婦女の身分的差異は特に感じられないといった指摘をしている¹⁷。

先行研究では、1800年に尚温を冊封するため来琉した冊封正使趙文楷と副使李鼎元の残した琉球女性についての作品については、歴代の冊封使の作品及び着目した視点に大きな違いがないように見られるが、果たして実際にそうなのであろうか。本稿では、趙文楷の「球女」、李鼎元の「中山雜詩二十首」其の六、「和寄塵竹枝詞十首并序」（その五、その六、その九）の5首の作品の分析を通して、趙文楷と李鼎元の眼に映った「女性」のイメージと、その作品の背景に着目しながら、先行研究とは異なる視点を提示し、琉球女性の庶民的な日常生活の一端を明らかにしてみたい。

一、趙文楷の作品

「球女」	趙文楷 ¹⁸
球女	
(首聯) 異俗一何怪	異俗 一に何ぞ怪ならん
南姑頂竹籃 ¹⁹	南姑 竹籃を頂く
(頷聯) 交通惟亥市 ²⁰	交通するは惟だ亥市にして
負載少丁男	負載するに丁男少なし
(頸聯) 赤脚拖三板 ²¹	赤脚に三板を拖き
青絲倒一簪 ²²	青絲に一簪を倒にす

(尾聯) 侏儻衣紅絹 侏儻 紅絹を衣て
倚市更無慙²³ 市に倚りて更に慙づること無し

【詩型】五言律詩。下平声十三覃韻。韻字は籃・男・簪・慙である。

【現代語訳】

異境の習俗は、どうしてこうもめずらしいのか。女性は頭上に竹籠を捧げるようにのせている（趙文楷の注：琉球語で、女のことを南姑（イナグ）と呼んでいる。竹籠に物を載せて、頭の上に頂く。物が軽いかどうかに関わらずとにかく手では持たない）。

行き来するのは決まって通う市場のみで（趙文楷の注：中国の「趁墟」という三日に一度開く市のような。みな女ばかりが集まり、男はいない）、市場の中を歩き来する者に荷物を運んでいる成人男子は少ない。

彼女たちは裸足に「三板」を履いている（趙文楷の注：琉球の草履は三板と呼ばれている）。黒い髪には一つの簪（かんざし）が逆向きに挿されている（趙文楷の注：簪の末端は前に向いている）。

「侏儻」は赤い絹の衣服を着ていて、市の傍で客引きをしているが、まったく羞恥心を表に表さない（趙文楷の注：妓女は皆赤い服を着て、自ら（妓女であるとわかるように）区別をつける。地元の呼び方は侏儻で、また傾城ともいう）。

【注釈】○南姑 趙文楷の注に言う「南姑」とは、琉球語のイナグ（女子）の音写である。徐葆光『中山伝信録』巻六「琉球語」：「女兒，會南姑括。」（訳：女（會南姑括）^{ウイナグ}）²⁴。周煌『琉球国志略』巻四下「風俗・儀節」：「國人呼男曰會几噶，女曰會南姑。」（訳：琉球国の人々は男をウイキガ^{ウイナグ}、女を会南姑と呼ぶのである²⁵）。趙文楷の「南姑」は前使の音訳の援用である。○亥市 決まった日に市を立てること。唐・白居易「江州赴忠州舟中示舍弟五十韻」：「亥市魚塩聚，神林鼓笛鳴。」○三板 趙文楷の注に言う「三板」とは、琉球語のサバ（草履）の音写である。汪楫『使琉球雜録』巻三「俗尚」：「履無貴賤，男女皆草鞞，名曰三板。」（訳：履物は、貴賤男女を問わず、みな「さば」とよぶ草履をはく）。趙文楷の「三板」は前使の音訳の援用である。○侏儻 趙文楷の注に言う「侏儻」とは、琉球語のジュリ（遊女）の音写である。遊女について、外間米子は「侏儻，尾類とも書くが、近代ではほとんど尾類という字をあてる。発生の歴史は不詳だが、中国との交流が盛んであつたころ（14世紀）から存在したといわれ、薩摩侵入後、貢租の取立てが厳しくなつて、農村の貧困家庭の娘が身売りをする例が多くなり、私娼が増えたため、1672年、摂政羽地朝秀によって辻・仲島の遊郭がつくられた（渡地遊郭は不詳）。羽地や次の摂政蔡温は、（中略）ジュリを容認しながら、士族の娘がジュリになることを禁じ、士族とジュリとの子を家譜に入れ

て系を乱すことを禁じた。²⁶と述べている。○倚市 遊女としての商売を指す。宋・蘇軾「次韻僧潛見贈」：「公侯欲識不可得，故知倚市無傾城。」○傾城 傾城について、高良倉吉は「色香で国や城を滅ぼすほどの美人の意で、転じて遊女・女郎とのことをいう。沖縄ではジュリと通称するが、史料には傾城の語で出てくる。〈中略〉史料のうえで本格的に記されているのは『羽地仕置』（1666-1673年）が最初である。それによると、首里・田舎をとわず、琉球一円の人士のあいだで傾城をかかえる風潮があり風紀が乱れていた。羽地朝秀は〈地方の住民で傾城として身を売ったり、傾城あそびをするようなことはまかりならない〉（1667年）と到達している。だが、その後も傾城問題は満足のいく解決をみず、首里王府は倫理・道徳を強調して傾城あそびに注意をうながす布達をしばしば発せざるをえなかった。²⁷」と説明している。

【分析】

この詩は、琉球の市場にいる2種の女性を詠んでいる。一人は頭に物を載せている普通の女性「南姑」であり、もう一人は赤い絹の衣を着ている遊女「侏儻」である。

首句「異俗一何怪」で、「怪異」という言葉を分けて詩句に嵌め込み、漢詩的な修辞技法が駆使されている。琉球の女性についての習俗は趙文楷の眼に不思議に映ったことが分かる。以下の光景はすべて趙文楷をして、そうした「怪異」を感じさせている。①頭に物を載せること。②市場には女ばかりがいること。③重労働（負載）の仕事で成人男子がやらないこと。④裸足で草履を履いてい

ること。⑤簪を逆向きに挿すこと。⑥遊女が赤い絹で識別すること。⑦遊女が堂々として市場に居座って人目を避けないこと。

そして趙文楷は以下のようなことを感じ取っている。①について、李鼎元も「是國中第一絶技也²⁸。」（これは國中第一の絶技である）と絶賛したように、頭に貨物を載せるのは、彼が中原では見たことがない妙技であること。②について、儒教の思想では「士農工商」の「商」は最も下位に位置する賤業だと思われ、女性については内職を意味するイメージが強く、女性しかいない市場に対する違和感。③について、男性のほうが体力があり重労働をするべきという先入観からくる違和感。④について、中国には纏足という女性習俗があるが、琉球には裸足で靴下をはかない女性が多く存在するという驚き。⑤について、中国では女性は簪を普通尖端を髪の中に挿し見えないようにしているが、琉球女性はそれと異なり逆向きに挿す不思議な習俗。⑥⑦について、市場で遊女であることを隠そうともしない厚顔な振る舞い。

詩の流れを見ると、前半は市場の情景を記している。後半の頸聯から女性の服飾に着目し、その視線から特に服飾が異なっている遊女に気づく。末句「更無慙」から、趙文楷は遊女の立ち振る舞いに驚いていたことが読みとれる。

首聯「南姑頂竹籃」と頷聯の注「如中國之趁墟皆女無男」と「負載少丁男」の光景は下記の1719年に来琉した徐葆光の『中山伝信録』の女集図（図1）から想像できる。市場には女性と子どもばかりいる。



図1：徐葆光「女集図」『中山伝信録』²⁹

また、頸聯の「青絲倒一簪（簪末向前）」は下記の図2から理解できる。

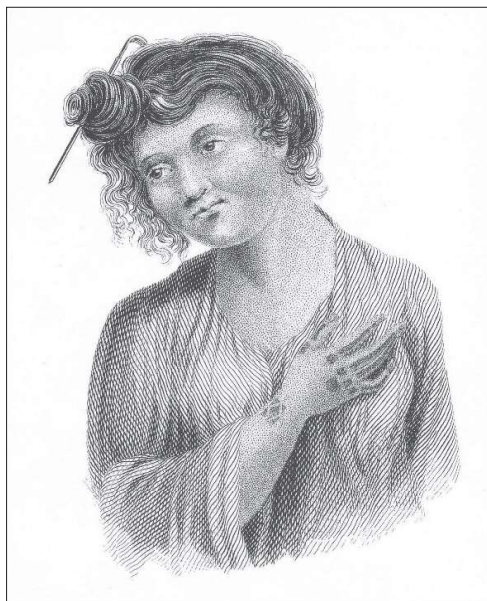


図2：「下層階級の美女」、1827年5月21日
スケッチ、ピーチー航海記³⁰

尾聯の上句「侏儻衣紅絹」とその注「妓皆衣紅以自別」から、遊女の服装は一般女性と識別できるようになっていたことが分かる。それについて、徐葆光の『中山伝信録』巻第六「女集」は、「土妓行市中、暑月衣襟上亦用紅絹縁於領掖間、以此識別。」（土妓が市へゆくときは、暑い季節でも、着物の襟はすべて紅絹を用い、領掖間も縁取りをして、識別している³¹。）と記している。『中山伝信録』の記述からみて、市に行く遊女は恐らく買い物をしていたのであろう。しかし、趙文楷の「倚市更無慙」の「倚市」は宋・蘇軾の「故知倚市無傾城」という典故から化し、ジュリの別名「傾城」にもかけている。「倚市」から遊女が市の傍で客引きしたりする様子を連想させる。

また、この詩には琉球の言葉を3つも嵌め込み（南姑〈イナグ〉、三板〈サバ〉、侏儻〈ジュリ〉）、異国の事象を記述する一方、異国情緒を織り込みたいという趙文楷の意図が見える。「南姑」(nangu)という言葉から「南の婦女」というイメージが思い浮かぶ。そのイナグの音訳は歴代の使節も差がなく、適訳だと思われる。三板(sanban)という言葉からも平らな履物といったイメージを想像できる。ただ、注目すべきなのは、ジュリの音訳の「侏儻」である。中国では「侏離」とは、元々西方の蛮人(西戎)の音楽のことを指す。嘉手納宗徳の考察によると³²、「侏儻」は使録の中での初出は明・蕭崇業『使琉球録』であるが³³、その前後の文脈から見ると、蕭崇業は、侏儻を琉球の音楽という意味で使用しているようで、実際に遊女を侏儻(ジュリ)として明記したのは、尚穆王の冊封副使周煌の『琉球国志略』である³⁴と指摘している。

歴代の冊封使はジュリに対する音訳は統一していない。徐葆光は「俗里」(suli)、周煌は「侏儻」(zhuli)、李鼎元は「俗里」(suli)としている。趙文楷はその中から、「侏儻」を選んだのは、琉球の遊女が宴楽の場面に関わることを微かに意識していた可能性を示唆しているように思える。

二、李鼎元の作品

李鼎元「中山雑詩二十首」その一で「海邦淹使節、問俗最關心」(海邦に使節となり淹まり、俗を問ふに最も關心なる)と記しているように、李鼎元は琉球の習俗をいろいろと尋ね、実に多くの詩を詠んでいる。「中山雑詩二十首」も「和寄塵竹枝詞十首」も妙趣に満ちている。これらの作品は、写実絵画のように当時の琉球社会の様相を表している。本稿はその中から琉球女性を詠んだ作品を選出して分析を試みたい。

「中山雑詩二十首」(その六) 李鼎元³⁵

(首聯) 市集皆夷女 市集に皆夷女なり
蓬頭載貨行³⁶ 蓬頭 貨を載せて行く
(頷聯) 曳襟勞兩手³⁷ 襟を曳き 兩手を勞し
穩歩注雙睛 穩に歩き 雙睛を注ぐ
(頸聯) 物以多為貴 物 多きを以て貴しと為し
人因賤不爭 人 賤に因りて争わず
(尾聯) 問男何所事 男 いずれの所に事すかと問ふに
非釣即躬耕 釣りに非ずんば 即ち躬耕せり

【詩型】五言律詩。下平声八庚韻。韻字は、行・睛・争・耕である。

【現代語訳】

市場には琉球の女性ばかりがいる。彼女たちは乱れた髪の上品物を載せて歩いている。(李鼎元の注：市場には男性がおらず、女性は頭に品物を載せて市場へ商いに行く。)

衿を押えるのには両手を使う(李鼎元の注：女の服装の衿には帯がなく、手で衿を掴んで歩く)。一步一步穏やかに歩き、両眼は前を見つめている。

市場では、物の量が多いのが良いとされている。価格を値切ようとして争わない。

男は何をしているのかと聞けば、釣りに行っているでなければ、畑仕事をしているだろうという。

【注釈】○蓬頭 よもぎのように髪毛の乱れた頭。晉・左思「白髮賦」：「髮乃辭盡、誓以固窮。昔臨玉顔、今從飛蓬。」

【分析】

この詩は、李鼎元の眼に映った市場の光景を詠み、その市場は「夷女」が仕切っているように見える。首聯「市

集皆夷女，蓬頭載貨行」は、趙文楷の「球女」の「異俗一何怪，南姑頂竹籃，交通惟亥市，負戴少丁男」と相応している。但し、趙文楷は驚きが目立つのに対し、李鼎元の描写は感情表現を入れず客観的で淡々としている。頷聯「曳襟勞兩手，穩歩注雙睛」では、女性たちの歩く姿を描いている。女性は自分の進む方向を注視している。李鼎元の注「女衣襟無帶以手曳襟而行」はなぜ琉球女性が両手で襟を抑えるのかの理由を説明すると同時に、間接的に趙文楷の「球女」の「以竹籃盛物頂於首，無論輕重總不以手執也」という奇妙な習俗の背景を教えてくれる。

頸聯「物以多為貴，人因賤不爭」には、市場の交易の情景が描かれている。中国では「物は稀を以て貴しと為し」といわれるように、物の稀少価値が問われるが、琉球の市場では品質より量つまり物の多さが求められている。また、口角泡を飛ばし値切ろうとする中国市場の様子とは異なり、価格交渉をしない琉球人の純朴な一面を示している。

尾聯「問男何所事，非釣即躬耕」では、女性ばかりの市場を見て、李鼎元自身、男性は一体何をやっているのか、という疑問が自然に出る。「提問（自問自答）」という修辞技法を駆使して、読み手の好奇心を引き起こす。中国では古くから「釣耕」という言葉を使って漁民と農民＝庶民を指す用例がある³⁸。よって、ここでの「非釣即躬耕」の「釣」は余暇としての釣りではなく、後ろの「躬耕（田を耕す）」と対応して漁撈を指す言葉であろう。自問自答から、琉球は農と漁を基軸とした社会であるとの李鼎元の認識が窺えるが、詩全篇に詩人の感情移入はなされておらず、写実的な風情が読み取れる。この詩の背景について、李鼎元『使琉球記』の8月9日の条では下記のように述べている。

余每出，見道旁聚觀夷婦，衣服，勤作多有異，未悉其俗。昨歸自集中，以問長史，始知國中男逸女勞，無肩擔・背負者。趁集・織紉及採薪運水，皆婦人主之，凡物，皆戴之頂。女衣既無鈕，無帶，又不束腰，而國俗男女皆無袴，勢須以手曳襟。襟較男衣長，疊襟下為兩層，風不得開。因悟髻必偏墮者，以手既曳襟，須空其頂以戴物。（私は外出するたびに、道のわきに集まって見物している琉球の婦人を見たのだが、服も、振る舞いにも、かなりの違いがあって、その習俗がよくわからなかった。昨日、市場から帰ってから、長史に聞いたが、やっと次のようなことが分かった。この国では、男逸女勞である。（男は）物を肩にかついたり、背負ったりはしない。市場で商うことも、染織と裁縫、それに薪をとり水を運ぶことも、みな婦人の仕事である。凡そ物は皆頭に戴くのである。ところが女の着物には、紐無く帯無く又腰を束ねない。而して国俗として男女共に袴がない。勢い須く手を以て襟を曳かねば

ならぬが、襟は男の着物に較べて長く襟の下はたたんで両層になっているため、風が開くことはない。困ってわかったが、髻が必ず^{かたよって}偏墮して居るのは手で以て襟を曳くので勢い其頭を空けて物を戴かねばならないからである。³⁹)

李鼎元は、琉球が「男逸女勞」であるということを、使録の中で、「頭で物を運ぶ技」「女の働き」そして「服装」を通して、詩より細かく記録している。李鼎元の詩からは使録にはない市場でのボリューム感を好んでいる買い物の傾向と働く女の様子が読み取れる。両方とも写実的な筆致で、詩から当時の市場そして琉球社会の庶民の風俗及び民情を窺い知ることができる。

李鼎元の「和寄塵竹枝詞十首并序」（『師竹齋集』）にも琉球女性についての描写が見られる。竹枝詞とは、楽府の一体であり、中唐に始まる男女の情や土地の風俗などを歌う民謡風の七言四句の詩型である⁴⁰。童宏民は1866年に来琉した冊封使趙新の「連章組詩」その二の注「前使汪舟次，林石來，徐澄齋三先生并著有中山竹枝詞」に基づき、歴代の来琉冊封使らが琉球を対象に詠んだ「竹枝詞」は、徐葆光の「球陽竹枝詞」、汪楫の「中山竹枝詞」2首と林麟焄の「中山竹枝詞」16首のみであると指摘している⁴¹。李鼎元の『師竹齋集』には従客の寄塵の竹枝詞10首に和韻⁴²する10首の竹枝詞を収録している。これらも歴代の冊封使らが琉球を対象に詠んだ「竹枝詞」に含めるべきであろう。ここでは、その竹枝詞の分析を試みたい。

「和寄塵竹枝詞十首并序」（その五） 李鼎元⁴³
寄塵の竹枝詞十首に和し、並びに序す

野田茅舍是農居 野田 茅舍 是 農の居
番薯盈筐戴入墟 番薯 筐に盈ち 戴いて墟に入る
手點墨梅花映肉⁴⁴ 手は墨梅を点し 花は肉に映え
見人含笑曳襟餘 人を見れば含笑し襟の余りを曳く

【詩型】 楽府。上平声六魚韻。韻字は、居・墟・餘である。

【現代語訳】

田野の茅葺の家屋が私の家である。籠いっぱいサツマイモを戴いて市に入る。

手に刺青で墨梅を描き、肌には花が引き立って美しく映えている（李鼎元の注：婦人は墨で手の甲に点を描いて飾りにし、その紋様は梅花のようである。服には帯や紐がない。裸足で籠を頭に戴いて市に入る。よく手で衿を掴んで歩く）。人を見ると微笑んで、衿の端を掴む。

【注釈】 ○寄塵 范衡麓。清、湖南衡山の人。字は奇塵。別号は八九山人。五歳の時、出家得度した。書と画をよくし、趙文楷と李鼎元の従客である⁴⁵。

【分析】

この詩は、女性の一人称を以て詠まれている。1句目

から女性の質素な暮らしぶりが窺える。2句目はその働いている姿を描きながら、琉球の物産（サツマイモ）、特別な習俗（頭で籠を載せること）を織り込んでいる。3句目では琉球女性の入れ墨に着目している。前掲の図2からその梅のような入れ墨が想像できる。最後の微笑みと衿の端を掴む仕草から女性の照れていて少し緊張した様子も窺える。この詩は竹枝詞の風俗や男女の情を歌う特徴を備えている。貧しいが質朴でよく働き愛嬌がいい琉球女性の姿が読み手の目に浮かぶ。中国では入れ墨は罪人の証なので、詩文では差別の対象として描かれやすい。例えば、前使の徐葆光は「球陽竹枝詞」（その三）⁴⁶の「纖纖指細玉抽芽，三五初交點點瑕」（纖纖として指細く玉の抽芽，三五初めて交かわす点々たる瑕）で、入れ墨の点は玉の瑕のようだというネガティブな表現をしている。しかし、李鼎元は「手點墨梅花映肉」（手は墨梅を点し花は肉に映え）という肯定的な表現をした上で、花と白肌がお互いを引き立てる文学的な美感も与えている。李鼎元の詩人としての豊かな感性と懐の深さを表している。

「和寄塵竹枝詞十首并序」（その六）李鼎元⁴⁷
 雙乳垂垂學抱瓜 双乳 垂垂として 瓜を抱くのを学ぶ
 庭中獨立望天涯 庭中 独り立ちて 天涯を望む
 竿頭笑指南風到 竿頭 笑いて指さす 南風到れると
 脱却襟裙嬾去遮⁴⁸ 襟裙を脱却し 遮を嬾り去る

【詩型】楽府。下平声六麻韻。韻字は、瓜・涯・遮である。

【現代語訳】

垂れたふたつの乳房は、まるで瓜を抱えているかのようである。ひとりで庭に立ち、ずっと遙か彼方を見つめている。

（急に）笑って船の帆柱の先を指し、南風が吹き始めたことに感じ入っている（もうすぐ旅に出ている夫が帰ってくる）。服がたれ落ちてても隠そうとしない（李鼎元の注：家に海を渡る者がいると、概ね小さな木船を作って庭に置く。帆柱と帆をみな備えており、南風を待って、それを以って帰りの時期を予測する）。

【分析】

この詩は航海者の家の習俗を詠んでいるが、年長の女性が詩の中で登場している。この詩を解説するには、下記の寄塵の竹枝詞を見る必要がある。

寄塵元唱：處處山田種地瓜（番薯別名），窮民飽嗔作生涯。文身裸體尋常事，也解襠前尺布遮⁴⁹（現代語訳：あまたの山の畑には地瓜（サツマイモの別名）を植えている。貧しい民が空腹をみたすことができ、これで生計が立つ。入れ墨そして裸でいるのは、ありふれた光景だ。股の襠の部分もなくただ小さな布で遮っている。）

1句目の瓜はへちま（絲瓜）パパイア（木瓜）スイカ（西瓜）などいろいろな可能性があり、寄塵の詩に呼応しているので、1句目の瓜は地瓜、即ちサツマイモという解釈もできよう。その垂れた乳房から年を取った婦人の姿を容易に想像できる。2句目からその女性が何かを待ち望んでいることが分かる。これもまた、読み手の好奇心を喚起する。そして3句目で、その謎を解いている。夫が家族の帰りをもたらす南風が吹いてきた。4句目の「襟裙」とは、もともと「対襟襦裙」（衿が左右対称に開く上着と下裳）を指しているが、ここは琉球女性が着ている衿が開いている長衣か下裳を表していると思われる。「脱却襟裙嬾去遮」では、興奮し慌てて服を落としたのか或いは素朴で無頓着なのか、まめに服に気をかける余裕がないという情景を描いている。ちなみに、八重山古謡にも「脱却襟裙嬾去遮」と類似した表現がある。「ザントウリユンタ」（バナリ若者ユンタ）という古謡には、「アバヌ／ウバイヌ／ナラムヌユ／パジケ」（訳：余りの／あわてふためきに／自分のミホトをかくしていた衣が／ついとれて）という節がある⁵⁰。ザン（ジュゴン）漁で捕まえたジュゴンや亀を見ようと走ってきたときあわてふためいて下衣を落とした女性を描いている。李鼎元の漢詩とは直接の関連は全くない二つの作品であるが、琉球女性の振る舞いが似ているように窺えて興味深い。

李鼎元のこの詩の表現はストレートであるが、俗世の純朴な女性の姿を浮き彫りにしている。また、その露骨な表現の「雙乳垂垂」は竹枝詞の中の民衆の気風を引き立てる。寄塵が詠んだ入れ墨をしたり、裸でいる琉球人のイメージに呼応し、李鼎元は半裸の女性を臨場感を帯びて描き出している。この詩の情景から考えると、恐らくその女性は自分の庭におり、外を通りかかった李鼎元が偶然に見かけたのかもしれない。

下記の図3は李鼎元が見た琉球女性を彷彿させる。

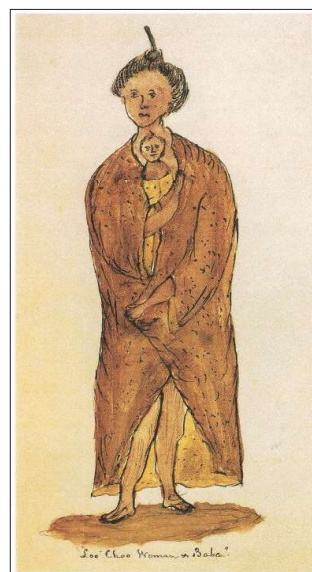


図3：スパイデン日記⁵¹

李鼎元は使録でも琉球女性について、特に中国と異なる習俗について、「髮垢即洗、洗用泥、脱衣結於腰、赤身低頭、見人亦不避。」(髪がよごれると洗うのだが、洗髪に泥を用い、着物を脱いで腰にくくりつけ、裸で頭を下にして洗い、人があらわれても、かくれることはしない⁵²。)と記している。当時の琉球女性の人に半裸の姿を見られても気にしない様相が窺い知れよう。実際に、1878年に日本を訪れたイザベラ・バードの『日本奥地紀行』にも次のように農村で見た半裸の女性たちの様子が記録されている。「広い納屋では、多くの男たちは裸のまま、女たちは腰まで肌脱ぎとなり、桑の葉をとっていた。…(中略)(女の人たち) 仕事中はみな胴着とズボンをつけているが、家にいるときは短い下スカートを付けているだけである。何人かりっぱな家のお母さん方が、この服装だけで少しも恥ずかしいとも思わずに、道路を横ぎり他の家を訪問している姿を私は見た⁵³」。琉球の庶民女性の体の露出に対する許容度は、当時の日本に似たものであったかもしれない。

小野まさ子は、「町田家文書」に収録された1865年に首里王府評定所が通達した「冠船付締方申渡候条々」に依拠し、「①首里・那覇・久米村・泊の女達は、唐人が見ているところを通るときには、支度をきちんとして、笠で顔を隠して通ること。②末々まで下着である袴を着け、その上に裙を着ること⁵⁴。」といった王府からの首里・那覇・久米村・泊の女達への厳しい下達があったことを指摘している。しかし、こうした下達は必ずしも守られていなかったことが、漢詩から窺える。

また、特筆すべきなのは、この詩に描かれている航海者の留守宅の帆柱と帆を備える小さな木船で風を見る「風旗(カジバタ)」の習俗である。波照間永吉の「風旗考」によると、風旗とは航海安全を祈願するための呪具で、旅に出ている人の家に立てられ、その下で女性によって航海・旅の安全を祈って祭祀が行われ、旅に出る人の地位により竿頭に載せる物に種類があり、馬艦船型や魚型以外度佳喇島の船、即ち和船型のもの、鳥型のものもあったという⁵⁵。李鼎元の詩句の「家有渡海者率造小木船置庭中」という自注から見ると、李鼎元が目にしたのは船形である。また、李鼎元の『使琉球記』に次のように更に詳しい記述がある。「庭に、長い竿を立てて、その上に小さい木の船が取りつけてある。船の長さは二尺、帆柱も帆も舵も櫓も、みなそろっている。船首と船尾に風車を五つ並べ、色旗を下げて、風の動きがわかるようにしてある。渡航者の家では、おおむね帰航の時期を予測するのである。南風が来ると、家をあげて、渡航者が帰ってくる、といて喜ぶ。渡航者が帰ると、撤去する。つまり、古代の五両旗の名残である⁵⁶」。なお、風旗を見つめる主人公は女性であることが、この詩からもうかがえる。女性による航海の祈願をする行動の根底は、琉球

にある姉妹の霊的な力が旅立つ兄弟を守護し、無事に戻らせてくれるというヨナリ神の信仰であろう。風旗という習俗の目的は決して風見のためだけのものではない。李鼎元の「南風を待ち、それを以って帰りの時期を予測する」とした詩注からは、無事の帰りを待ちわびる女性の思いが感じ取れる。豊見山和行は「船と琉球史—近世の琉球船をめぐる諸相—」の中で、琉球が日本の従属化にあることを秘匿するために、1854年に通達された「異国人江返答之心得」の中に、琉球の旅行きの家で、やまと風見簾が立てられている点を質問されたならば、琉球人は渡海先がどこであれ、留守宅では風見のため、琉球船型やトカラ島船型、鳥魚の類の板札を各家庭の好み次第で風見旗として立てる風俗があると答えることとし、日本型の風旗について問われた際には、風見のため各家庭の好みによるものと答えるよう徹底した隠蔽の指示をしていたことを指摘している⁵⁷。李鼎元が目にした風旗は日本の影響を受けた和船型だったかもしれないが、李鼎元は使録そして全詩において、王府が「国難」として憂慮した隠蔽に触れることはなかった。歴代の冊封使は王府の隠蔽政策を感じつつも、それを詮索し問題視するような行動をとることはなかったが、その点は李鼎元も同様である。ちなみに、前使徐葆光も風旗をテーマにしている漢詩があるが、その中では風旗は風見の働きしかない。また、女性も登場していない⁵⁸。李鼎元の風旗に対する作品は徐葆光より琉球の風俗に一步踏み込んだ詩的描写となっている。

「和寄塵竹枝詞十首并序」(その九) 李鼎元⁵⁹

衣惟寛博不須裳 衣 惟だ寛博として裳を須いず
俗俚花簪玳瑁長⁶⁰ 俗俚の花簪 玳瑁長し
暗約歡來將夜半 暗かに歡の來たるを約し將に夜半
先調箏柱置樽旁 先に箏柱を調べ樽の旁らに置く

【詩型】楽府。下平声七陽韻。韻字は裳・長・旁である。

【現代語訳】

ジュリは裙のないゆったりとした服を着て、模様がある長いタイマイの簪を髪に挿している(李鼎元の注:この地の妓女はジュリと呼ばれ、タイマイの簪を挿し、赤い服を着ている)。

真夜中に来訪するよう恋人を密かに誘い、箏柱を音合わせし、酒樽のそばに置いておく。

【注釈】○歡 恋人。北宋・郭茂倩『楽府詩集』呉声歌曲一「子夜歌之四」:「自從別歡來、奩器了不開。」

【分析】

この詩は男女の恋という竹枝詞の伝統をテーマとしているが、主人公は遊女である。1, 2句目は衣服と簪で遊女の身分を語る。当時の百姓の簪は、亀甲、木、真鍮製であった⁶¹。詩に現れる遊女は亀甲の簪を挿して、目

立つ赤い服を着ている。2句目には、ジュリのことを李鼎元は独自の当て字「俗俚」にしているのは、それなりの考えがあったからであろう。俗とは、時代や土地ごとの風習・風俗。俚とは、卑しいそしてひなびたさまを表す。「俗俚」から、李鼎元の琉球遊女の存在は卑しい「負」的イメージを有する風俗であるという認識が垣間見える。ちなみに、李鼎元が編纂した琉球語辞書『球雅』であるとされている『琉球記』には、「伎曰俗里」（妓女のことを俗里という）と記されている⁶²。遊女に対して「俗里」という否定的な意味をもたない字をあてている。それは前使徐葆光の『中山伝信録』から踏襲した音訳である。

3句目は忍び入って情を通じる来訪を暗示している。4句目では箏も酒樽も準備していることから、恋する男への誘いを宴楽という場面に繋げている。

李鼎元は『使琉球記』の5月14日の条で「聞球俗有紅衣土妓，論令驅逐，無附近使館蠱我從人。」（琉球の風俗に、紅衣の土妓がいることをきいていたので、天使館に近付いて、私達の従人を誘惑しないよう、論令を下して追い払った。）と記している。また、6月8日の条では、「初見紅衣人，頭面較良家修飾，衣亦鮮潔。蓋國俗不穿耳，不施脂粉，無珠翠首飾；此輩誨淫，或私為冶容，偷施脂粉耳。」（初めて紅衣の人を見た。頭や顔は、良家の女性とくらべて、飾りたてており、身に着けているものも派手である。この国では、女性は耳に穴をあけたりはしない。口紅白粉はつけず、真珠や翡翠のネックレスもしない。この人たちは、淫らなことに誘いこむため、多分、ひそかになまめかしい姿をし、口紅白粉をつけているのであろう。）と、遊女の妖艶な身だしなみは誘惑するためだと警戒している。

使録と違って、詩の中で李鼎元は冊封使としての身分に拘らず、遊女の情事に思いを馳せ、仕草を通して客人の到来を楽しみにしている琉球遊女の心情を描出している。童宏民が指摘しているように、中国文学の伝統上、男性作家が想像力を用いて、女性の心の内を描くといった創作手法がよく見受けられる⁶³。ただ、遊女の服飾と密会の弾んだ気分を描写しているこの詩は、男の帰りを待つ女の嘆きをテーマにしている閨怨詩よりも、六朝期の宮体詩以来の艶情詩に近い。また、密会の準備として楽器（箏）に焦点をおいて描写をしているのは、琉球の遊女はよく宴楽として奏でているという李鼎元の先入観から来ているのかもしれない。李鼎元も徐葆光同様に、実際に目睹したわけではないが、琉球の社会風俗に対して、詩人の想像力の豊かさを見せてくれている。

おわりに

趙文楷と李鼎元の琉球女性の作品には、1800年の琉球にいる市場の女性、遊女が見える以外に、先行研究に言

及されたことがない半裸の女性も登場している。李鼎元は詩の中の半裸の女性の描写を通して、航海に出た男子を見守る、家族の心情を読み手にイメージさせている。また、遊女に対しては一般の「道徳規範」で判断するのではなく、李鼎元は「和寄塵竹枝詞十首并序」（その九）の中で批判せず遊女の細やかな心情を描き出している。

一方、趙文楷と李鼎元の作品に現われる女性が市場を仕切っていることについてであるが、李鼎元の使録に記している「男逸女勞」の背景に、廖肇亨が「琉球の海商型文化」があるとする指摘は、当時の社会状況を見据えていない。豊見山和行の「商行為・裁判からみた首里王府と女性」によると、一八世紀になると都市部(町方)への人口の流入と士族層の人口増により、知行(俸禄)にありつけない貧窮士族層を生み出すことになり、その対処策のひとつとして、一七二五年に諸職への士族の就職を解禁する法令が布達され、士族女性も商業に携わる機会が増えるようになったという⁶⁴。また、小野まさ子は市場に女性が集まる背景について以下の指摘をしている。

沖繩を訪れたといっても、一部の人を除けば、それは寄港地の那覇、およびその近辺の見聞に限って行われたものである。那覇の女性たちに対する評価であったといっても過言ではないだろう。…働く女性たちを作り出したのは、首里王府の役人登用の政策故のことであったからだ。…一六六七年に摂政になった羽地朝秀以後、古琉球から近世琉球への政策的転換をはかっていく過程で、家譜を中心とした新しい身分制度が登場した。…首里王府の役職には、士族身分から世襲と科という試験任用制度を併用して任用したのであった。そのために、上級士族はその門中の力などを利用して、基本的には世襲で王府に任官することができたが、下級の士族層には世襲での任官を望むことは厳しく、もっぱら科に合格することで任官を待つしかなかった。…この任官のない士族層については、…一部は首里での任官を断念して「ヤードウイ」などのように田舎へ下り、耕作などをして生計を立てるものもあったが、一方では家族の中の女性たちが那覇の市に立ち、商いをしつつ夫たちの任官を待つということがあった。⁶⁵

市場に集まる女性の中には、こうした王府からの俸禄が与えられない下級士族の妻らも多かったであろう。もちろん市場にいる女性はみなそうした下級士族の妻であるわけではない。那覇市場で魚を売る人には、糸満の女性と那覇の湧田の女性が多く、漁師は女を船に乗せていけないという考え方が根強いが、市場の生業ではかなりの部分を女性に依存していたという⁶⁶。また、十八世紀以降、琉球王府は財政難を切り抜ける策として多額の献

金をする者を新参士族に取り立てる制度をもうけており、中には商活動で蓄積した富で士族に昇格し、百姓身分の「無系」から家譜をもつ「有系」になった女性もいる⁶⁷。市場にはこうした様々な女性らが集まっていたと考えてよい。このようなことから、趙文楷と李鼎元の作品に現われる市場を仕切っている女性については、李鼎元の使録に記している「男逸女勞」の背景に「琉球の海商型文化」があるとする廖肇亨の指摘は当たらないだろう。

上述したように、趙文楷と李鼎元の琉球女性の作品には、市場の女性以外に、先行研究で言及されることがない半裸の女性も登場し、李鼎元は詩の中の半裸の女性の描写を通して、航海に出た男子を見守る、家族の心情を描いている。冊封使の渡来中には首里王府評定所から「冠船付締方申渡候条々」が布達され、身なりについても厳しく規制が出ていたが、漢詩に現れる半裸の女性の描写を通して、そうした布達が必ずしも徹底されていなかった状況も窺い知れる。

また、遊女について、童宏民は「道德規範」の尺度で遊女（土妓・紅衣人）を批判した張学礼、周煌、李鼎元等とは全く異なり、歴代の冊封使の中では徐葆光だけが遊女を蔑視せず、冷静に客観視する視点を持ち得ているとしているが、李鼎元も「和寄塵竹枝詞十首并序」（その九）の中で、遊女の細やかな心情を描き出している。

趙文楷と李鼎元の詩作は、読み手に写実的な筆致で1800年の琉球の情景を見せてくれる。また二人の作品を通して王府の史料からは具体的にイメージできない当時の風俗や民情も窺い知ることができる。趙文楷と李鼎元の詩には、史料には表れない当時の琉球社会の様相が、生き生きと臨場感あふれる手法で描出されている。

引用文献・注

- 1 平良妙子「来琉冊封使の旅程と作品—清代の詩文を中心に—」, 2003年度琉球大学院人文社会科学研究所修士論文。
- 2 童宏民「冊封副使徐葆光の眼光:『奉使琉球詩』の分析を中心に」, 2014年度琉球大学博士論文。
- 3 廖肇亨「乾嘉詩學中的琉球光影—以嘉慶五年琉球冊封使趙文楷、李鼎元の海洋體驗為中心」『第十二屆中琉歷史關係國際學術會議論文集』北京図書出版社, 2010年, 139-155頁。
- 4 廖肇亨「歸來壓扁翠雲鬢:琉球竹枝詞中的女性角色與社會生活」『海洋文化學刊』18期, 国立台湾海洋大学海洋文化研究所, 2015年, 33-62頁。
- 5 平良妙子前掲論文, 234頁。
- 6 同上, 238頁。
- 7 同上, 240頁。
- 8 同上, 244頁。
- 9 童宏民前掲論文, 254-255頁。
- 10 同上, 277-278頁。
- 11 「清代中葉の琉球労働市場以女性為主的景光, 對來自漢人父權宗法社會, 與男性勞動力的漢人士大夫趙文楷, 李鼎元等人形成某種程度的文化衝擊。」, 廖肇亨前掲論文 (2010年), 153頁。
- 12 「從琉球竹枝詞來看, 相對於鮮明活躍, 勤勉能幹的琉球王國女性圖像, 琉球男性角色幾乎是一大片空白。偶一出現, 其好逸惡勞幾乎也成為琉球冊封使特意渲染的精神特質, 此固然有可能來自琉球冊封使的誤解, 卻也無意間反映出中國農耕與琉球海商文化型態的差異」, 廖肇亨前掲論文 (2015年), 57頁。
- 13 同上, 51頁。
- 14 「琉球女性的印象主要來自紅衣土妓與頂運南姑, 成為了歷來琉球竹枝詞中女性形象的基調, 反映著中國使節的文化傾向與偏好。」同上, 33頁。
- 15 「…琉球冊封使將紅衣土妓與玳瑁簪並列, 兩者似乎具有共通的文化意涵。」同上, 43頁。
- 16 「紅衣土妓平常以玳瑁簪為頭飾, 若結識中國客商贈之以金銀簪, 則可破例配戴之, 因此紅衣土妓配戴銀簪的形象意謂著中琉文化的混搭。」同上, 57頁。
- 17 「但稍早的徐葆光在中山竹枝詞與子夜歌中卻隱然主張兩者相通, ……壓匾翠雲鬢本是形容頂運南姑不對稱的髮型, 但此處移之施諸遊女, 暗示徐葆光將二者混而觀之。……或許在徐葆光看來, 遊女亦與村婦無二。」同上, 53頁。
- 18 趙文楷「槎上存稿」『石柏山房詩存』卷5, 咸豐7年(1857)刊本(『國家圖書館藏琉球資料三編 下』北京図書出版社, 2006年, 73-74頁)。
- 19 趙文楷の自注:「球言女曰南姑以竹籃盛物頂於首無論輕重總不以手執也」(球言にて女, 南姑と曰く。竹籃を以て物を盛り, 首に頂く。輕重を論ずること無く, 総て手を以て執せざるなり。)
- 20 趙文楷の自注:「如中國之趁墟皆女無男」(中國の趁墟の如く, 皆女にして男無し。)
- 21 趙文楷の自注:「球履名三板」(球履 三板と名づく。)
- 22 趙文楷の自注:「簪末向前」(簪の末 前に向かう。)
- 23 趙文楷の自注:「妓皆衣紅以自別土名侏儻猶言傾城也」(妓 皆紅を衣にして以て自ら別にし, 土名は侏儻なり, 猶傾城を言うがごとし。)
- 24 原田禹雄『徐葆光 中山伝信録 新訳注版』榕樹書林, 1999年, 557頁。
- 25 原田禹雄訳注『周煌 琉球國志略』榕樹書林, 2003年, 295頁。
- 26 外間米子「ジュリ」『沖繩大百科事典』中巻, 沖繩大百科事典刊行事務局, 沖繩タイムス社, 1983年, 389頁。
- 27 高良倉吉「傾城」『沖繩大百科事典』中巻, 沖繩大百科事典刊行事務局, 沖繩タイムス社, 1983年, 9頁。

- ²⁸ 李鼎元『使琉球記』巻5, 8月9日の条, 近代中国史料叢刊, 文海出版社, 1970年, 209頁。
- ²⁹ 前掲書『徐葆光 中山伝信録 新訳注版』, 496-497頁。
- ³⁰ 「ステイプル・エングレイピング」原画=スミス, 版画=フィンデン。ラブ・オーシュリ/上原正稔編著『青い目が見た大琉球』ニライ社, 2000年, 51頁。
- ³¹ 前掲書『徐葆光 中山伝信録 新訳注版』, 499頁。
- ³² 嘉手納宗徳「『侏儻』というコトバ」『琉球史の再考察』沖繩あき書房, 1987年, 346-349頁。
- ³³ 明・蕭崇業『使琉球録』巻下「羣書質異・杜氏通典」: 「樂用絃歌, 酒間度新聲, 哀怨凄切。嘗令夷大夫譯其曲, 有「海不揚波, 舟航利涉」之句, 若爲余二人而頌者。餘雖侏儻無可與辯, 然嘆老嗟貧, 悲睽歡聚之意, 大約人情不甚相遠如此。」(嘉手納宗徳の訳: 樂は弦歌を用ふ。酒間の, 度は新声にして, 哀怨凄切たり。嘗て, 夷の大夫をしてその曲を訳せしむるに, 海, 波を揚げず, 舟, 航して利渉するの句あり。余二人のためにして頌するものの如し。残りは侏儻の与に弁ずべきもの無しといえども, しかも老をなげき貧をなげき, 悲しみでははなれ, 歓びてはあつまるの意あり。大約, 人情甚しくは相遠からざること此の如し), 嘉手納宗徳前掲書, 348頁。
- ³⁴ 「臣茲役甫至, 風聞土妓甚衆, 謂之(侏儻)一實則(傾城)二字之音也。」(嘉手納宗徳の訳: 臣, この役はじめて至るとき, 風聞するに, 土妓甚だおおく, 之を侏儻という。実は則ち傾城二字の音なり), 嘉手納宗徳前掲書, 348頁。
- ³⁵ 李鼎元『師竹齋集』巻13, 嘉慶7年(1802)刊本(『国家図書館蔵琉球資料三編 下』北京図書館出版社, 2006年, 217頁)
- ³⁶ 李鼎元の自注: 「集無男子女人頭載貨入市交易(集に男子無く, 女人頭へ貨を載せて, 市に入り交易す。)
- ³⁷ 李鼎元の自注: 「女衣襟無帶以手曳襟而行(女衣の襟は帶無く, 手を以て襟を曳きて行く。)
- ³⁸ 南宋・陸游「即事四首 其二」: 「釣耕本是求賢地, 宵旰今逢願治時。」元・甘復「送別」: 「古來盛名士, 多是起釣耕。」
- ³⁹ 現代語訳は筆者が原田禹雄『使琉球記 口語全訳注』310頁(言叢社, 1985年)と船越義彰「那覇変遷記一 解題・船越義彰」『那覇変遷記』57頁(沖繩タイムス社, 1978年)の訳を基に少し修正を加えたものである。ちなみに, 榕樹書林版の原田禹雄訳注『李鼎元 使琉球記』(2007年)は8月8日と8月9日の条を収録していない。
- ⁴⁰ 戸川芳郎監修, 佐藤進・濱口富士雄編著『全訳 漢辞海 第三版』の「竹枝」の項, 三省堂, 2015年。
- ⁴¹ 童宏民前掲論文(2014年), 242-243頁。
- ⁴² 和韻とは, 漢詩で他人の詩と同一の韻を用いて詩を作ること。
- ⁴³ 前掲書『師竹齋集』, 225頁。
- ⁴⁴ 李鼎元の自注: 「婦人以墨點手背為飾如梅花衣無帶鈕赤足戴筐入市嘗以手曳襟而行(婦人は墨を以て手背に点しと為し, 梅花の如し。衣は帶紐無し。赤足で筐を戴いて市に入る。手を以て襟を曳いて行く。)
- ⁴⁵ 原田禹雄訳注『李鼎元 使琉球記』閏4月18日の条の注(4), 榕樹書林, 2007年, 179頁。
- ⁴⁶ 徐葆光「球陽竹枝詞(その三)全詩: 「纖纖指細玉抽芽, 三五初交點點瑕。牆上空憐小垂手, 迴風如卷落梅花。」徐葆光の自注: 「女十五黥手指背墨點如梅花」(『舶中集』上海図書館蔵雍正刻本『国家図書館蔵琉球資料三編 上』北京図書館出版社, 2006年, 265頁。)
- ⁴⁷ 前掲書『師竹齋集』, 225頁。
- ⁴⁸ 李鼎元の自注: 「家有渡海者率造小木船置庭中竿頭桅帆畢具候南風以卜歸期(家に渡海の者有らば, 率ね小木船を造り庭中に置く。竿頭, 桅帆畢く具え, 南風を候って, 以て歸期を占う。)
- ⁴⁹ 前掲書『師竹齋集』, 227頁。
- ⁵⁰ 喜舎場永珣『八重山古謡』下巻, 沖繩タイムス社, 1970年, 294頁。
- ⁵¹ Speiden, William Jr.: Journal of a Cruise in the U.S. Steam Frigate Mississippi 1852-1854. (Unpublished Manuscript). ラブ・オーシュリ/上原正稔編著『青い目が見た大琉球』ニライ社, 2000年, 185頁。
- ⁵² 前掲書『使琉球記 口語全訳注』8月9日の条, 311頁。
- ⁵³ イザベラ・バード著・高梨健吉訳「第十一信」『日本奥地紀行』平凡社, 2001年, 94-98頁。
- ⁵⁴ 小野まさ子「コラム 冊封使をむかえた那覇」『沖繩県史 各論編 第四巻 近世』沖繩県教育委員会, 2005年, 378頁。
- ⁵⁵ 波照間永吉「風旗考」『沖繩文化—沖繩文化協会創設七〇周年記念誌—』『沖繩文化』編集所, 2020年, 255-280頁。
- ⁵⁶ 前掲書『李鼎元 使琉球記』9月25日の条, 449-450頁。
- ⁵⁷ 豊見山和行「船と琉球史—近世の琉球船をめぐる諸相—」『船の文化からみた東アジア諸国の位相—近世期の琉球を中心とした地域間比較を通じて—』関西大学文化交渉学教育研究拠点, 2012年, 35頁。
- ⁵⁸ 徐葆光「球陽竹枝詞」其の一: 「小船轟起半天中, 一尺檣懸五寸篷。渡海歸人當有信, 竿頭昨夜是南風。」詩の末尾には, 「渡海之家, 例造小木船, 桅帆畢具。置竿頭, 立庭中。候風, 以卜歸期。自閩歸國, 皆以南風為候。」という自注がある。(前掲書『舶中集』上海図書館蔵雍正刻本, 265頁。)
- ⁵⁹ 前掲書『師竹齋集』, 226頁。
- ⁶⁰ 李鼎元の自注: 「土妓呼為俗俚緝瑠瑯簪著朱衣(土妓, 俗俚と呼ぶ。瑠瑯の簪を緝し朱衣を着る。)

- ⁶¹ 崎間麗進「第四章 女のくらし／第一節 那覇女の食・衣生活」『なは・女のあしあと 那覇女性史（前近代編）』那覇市総務部女性室，株式会社琉球新報社事業局出版部，2001年，180頁。
- ⁶² 胤森弘・丁鋒『琉球訳』（北京図書館本），『近世方言辞書 第6輯 琉球館訳語／琉球訳』港の人，2000年，146頁。
- ⁶³ 童宏民前掲論文（2014年），274頁。
- ⁶⁴ 豊見山和行「第一章 社会のなかの女性たち／第三節 商行為・裁判からみた首里王府と女性」『なは・女のあしあと 那覇女性史（前近代編）』那覇市総務部女性室，株式会社琉球新報社事業局出版部，2001年，68頁。
- ⁶⁵ 小野まさ子「第一章 社会のなかの女性たち／第二節 働く女性の姿をもとめて」『なは・女のあしあと 那覇女性史（前近代編）』那覇市総務部女性室，株式会社琉球新報社事業局出版部，2001年，58-59頁。
- ⁶⁶ 上田不二夫「第三章 生業 第三節 漁撈」『那覇市史 資料篇第1巻7 家譜資料三』那覇市企画部市史編集室，1982年，262・263頁。
- ⁶⁷ 源武雄「序説」『那覇市史 資料篇第1巻7 家譜資料三』那覇市企画部市史編集室，1982年，8頁。